

特集「ナショナリズムの表現」：18世紀をとらえる観点

著者	崔 官
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	8
ページ	291-302
発行年	2010-08-10
URL	http://doi.org/10.15002/00022640

18世紀をとらえる観点

崔 官

1. 18世紀の西洋と東洋

18世紀を考える際、「一つの世紀」「100年」という捉え方は西洋的な概念であるが、これをどのようにとらえるかということが問題になる。一つの考え方としては、同じ時期に西洋がどのようになっており、また、東洋はどうだったのかを考えるという方法がある。東洋の中でも、「東アジア地域はどうであったか」、あるいは「中国はどうか」「朝鮮はどうか」「日本はどうか」ということを空間的な面からとらえることが一つの方法となるだろう。もう一つの方法は、空間的な側面ではなく、時間的な側面をとらえるというものである。これは、例えば、17世紀、18世紀、19世紀の特徴というものがそれぞれどのようなものであったのかを考えるという方法である。この方法では、18世紀の持つ意味というものが横断的に検討されることになる。周知の通り、西洋では18世紀に近代国家が誕生し、その後の帝国主義への道が開かれたのだが、このときの西アジアや東アジアがどのような特徴を持っていたのかを、17世紀と19世紀と比較することが可能になる。そして、第三の方法は文化的な側面からの特徴付けである。18世紀になると、ヨーロッパでもアジアでも、自国の文化に対する認識が高まるという共通の傾向が見られる。文化を出発点とすると、政治上の特徴とは異なった特徴が明らかとなる。

まず、第一の点について考えてみよう。イギリスで産業革命が起きるなど、18世紀中盤から後半にかけて、イギリスをはじめとする西洋は近代産業社会に突入した。近代産業社会はその次に登場する資本主義社会と直接に結び付くことになる。近代の大きな特徴は科学と経済を中心とする社会であり、これが

ヨーロッパからはじまった。二つ目の特徴はアメリカの独立宣言（1776年）やフランス革命（1789年）にみられるように、18世紀後半から末にかけて近代市民社会が形成されることになる。この近代市民社会は、近代国民国家へとつながっていくが、個人や国民、あるいは国民国家といった近代を象徴する概念は、西洋においては18世紀末にはほぼ出来上がっていたとすることができる。つまり、「科学と経済」と「国民国家」という近代の大きな二つの柱は、18世紀に出揃ったのである。また、東洋との関わりでいえば、18世紀からイギリスを筆頭として、本格的な東洋への進出がはじまった。もちろん、17世紀に東インド会社が果たした役割を見逃すことはできないが、18世紀になって東洋に対する進出がより本格化しはじめるのである。

そして、18世紀は、国力や科学技術力、経済力といった様々な側面で、東洋と西洋の立場が逆転する時期といえるだろう。東アジアあるいは西アジアは、例えば中国の宋王朝のように、近世の開始はヨーロッパよりも早かった。ヨーロッパの近世をルネッサンスによってはじまったととらえるならば、東洋の方が500年近く先に近世に入ったということになる。しかし、近世から近代へと移行するまでの時間についていえば、東洋よりも西洋の方が短い。つまり、西洋よりも先に近世を迎えた東洋はなかなか近代に移行できず、東洋よりも遅れて近世に到達した西洋の方が短い期間で近代に突入したということになる。この時間差が何によるものかという点は非常に重要であろう。

2. 近世東アジア三国

2-1. 地域圏内の安定と民族意識の成長

次に第二の方法である、世紀ごとの比較を行ってみよう。空間的な比較を行った結果、西洋は東洋に比べて短期間のうちに近世から近代に移行した。このような変化の中であって、近世の東アジア諸国が置かれた状況はどのようなものであっただろうか。ここでは、朝鮮・日本・中国を中心として考えてみることにする。18世紀における東アジアの状況というのは、17世紀までに比べ、文化的にも政治的にも、比較的安定していた時期であるといえる。周知の通り、16世紀末、豊臣秀吉の朝鮮侵略による東アジア三国の戦争があり、以後日本

では江戸幕府が成立し、中国では明から清への王朝交代があった。つまり、日本と中国では17世紀に新しい政権が誕生し、国内政治においても国際関係の面でも安定期に入ったのが18世紀であるといえよう。

異民族王朝である清は、当初、国内においては統治の正当性を確保するために力を費やす必要があり、他方、国際社会においては朝鮮や日本とどのような関係を構築するかが問題となった。しかし、18世紀に入って国内の反対勢力を平定し、東アジア地域の国際秩序に対する感覚や意識が確立したことで、対内的にも対外的にもどのように行動すべきかという点を身に付けたのである。18世紀の朝鮮では、1724年から76年間を、英祖（在位：1724-76年）と正祖（在位：1776-1800年）という二人の国王が統治した。この時期は、朝鮮時代後期の文化が復活した文化復興期であり、かつ、小中華意識が基礎的なまとまりを見せた時期でもある。この背景には、異民族王朝である清による中国の統治を思想の上では認めたくない、中華文化の精神を継承しているのは朝鮮民族だ、という意識が存在し、それが小中華意識の高まりを促進させたのである。

一方、18世紀の日本はどうかであろうか。一般的には、新井白石の正徳の治（1709年）、徳川吉宗の享保改革（1716年）、松平定信の寛政改革（1787年）といった、幕政改革に注目が集まっているといえよう。しかし、管見では、18世紀における幕府統治は制度的に確立しており、政治的には安定期に入っていたと思われる。そのため、18世紀の日本の問題は政権の問題ではなく、17世紀や19世紀に比しても、幕府政治は成熟していたといえよう。同時に、朝鮮の小中華意識との比較に値する日本型華夷意識、すなわち、日本が世界の中心であり、それ以外はすべて野蛮であるという、他方で神国意識とも結びついた意識が、18世紀になって文学などの分野でも広まっている。これは、異民族王朝である清の中国統治に対する日本の反応であるといえる。

再び中国についてみると、17世紀までは清の統治に対する抵抗があった。しかし、1661年に即位した康熙帝が呉三桂らによる三藩の乱を鎮圧して抵抗勢力の一掃に成功すると、康熙帝（在位：1661-1722年）、雍正帝（在位：1722-35年）、乾隆帝（在位：1735-95年）の三人が統治し、18世紀の清朝は全盛期を迎えた。実際に、18世紀の清朝はチンギス・ハーン以来の広大な領土を支配している。それゆえ、東アジア世界には以前とは異なる国際秩序意識が

存在するものの、各国の国内政治は安定していたとみることができる。

このように中国大陸の支配者が漢民族から異民族に変わったことで、朝鮮では小中華意識が、日本では日本型華夷意識が芽生え、自民族を中心として物事を考えるという態度が生じた。こうした状況に対して、しばしばナショナリズムという言葉でもって説明されてきた。しかし、ナショナリズムとは西洋近代の国民国家に由来し、国民国家を前提とする用語であることから、近代以前の状態にある東アジア諸国については、今日誤解を招きかねない「ナショナリズム」という用語より、「近世民族主義」というふうに表現するのが適切ではないかと思われる。また、翻訳語を考えてみても、国民主義、国家主義、国粋主義、民族主義などと、種々の言葉が用いられることが示すように、nationalismという単語は、学術用語としてはあまりにも振幅が大きく、結果として様々な問題が生じる可能性があるといえる。

それでは、東アジアにおいて、西洋におけるナショナリズムに類似する動きはなかったのであろうか。それは、古代以来続いているとみることができる。中国における漢民族、朝鮮における韓民族、日本における大和民族が、一つの民族単位として成立してきた。中心国である中国の文化（漢民族文化）を受容・消化しながらも、周辺地域の朝鮮や日本は自民族の固有文化を守ってきた。しかし、場合によっては戦争を通して民族意識が高まったりすることもある。したがって、一国の民族主義を考える前に、東アジアにおける前近代の民族主義を考える必要があるだろう。また、その民族主義の中身としては、例えば中国であれば清の皇帝を中心とした民族主義なのか、漢民族における中華民族としての民族主義なのかについての認識が必要である。また、中央集権的な朝鮮の場合では、朝鮮国王に対する忠誠と国への忠誠とはほぼ一致する概念となる。これに対し、日本では、その中心点が将軍なのか、あるいは天皇なのか、といったように、隣国の近世民族主義との差異を見落とさないことが重要だといえよう。

2-2. 近世的な文化の発展

第三の、文化という観点から考えてみよう。18世紀におけるこのような政治的安定の上で、既存知識の総整理という作業が中国、朝鮮、日本のいずれに

においても行われ、新しい学問や思想が成立している。また、芸術の上でも変化が生まれている。これらは中国の文化意識との関わり方が影響しているだろう。18世紀のヨーロッパでは百科全書派が活躍したが、朝鮮でも国王の英祖が『東国文献備考』の編纂を命じている。ここでいう「東国」とは中国を基準にしての東、すなわち朝鮮を指しており、朝鮮で発行された文献を国家事業として網羅的に収集した作業であった。1770年に100巻が刊行され、約240年後の1908年まで『増補文献備考』として続編が出版され、巻数は250巻を数えている。

また、朝鮮では18世紀になって「實學」（實事求是之學）という新学風が興り、朴趾源、洪大容、朴齊家といった朝鮮後期を代表する思想家たちが登場した。当初、清の文化を認め、中国から学ぶべきものは学ばなければならないという意味から「北学」ともいうが、次第に朝鮮の人々のために実用的な物事を見習おうとする実学へと重心を移動させ、これは今日に至っても韓国における一つの流れとなっている。他方で、キリスト教を学び、あるいは信仰する、天主学も起きている。宣教師がほとんど足を踏み入れたことのない朝鮮では、朝鮮人が北京まで向うて洗礼を受けたり文献を研究した。これは、ローマ・カトリック教会にとっては一つの奇跡ともいうべきものだが、のちにはキリスト教信仰が発覚し、性理学以外を認めていなかった朝廷によって弾圧が行われることになった。18世紀になって成立した天主学は朝鮮にとっては新しい学問であり、これが時代とともに勢力を増すことになる。また、芸術の分野では、18世紀に入ると中国の文人画を踏襲するのではなく、「真景山水画」と呼ばれる、朝鮮の風景や物を写實的に描く山水画が誕生した。また、風俗画という、庶民の一般生活を描く絵画も現れた。代表的な画家は申潤福や金弘道だが、庶民の日常生活が題材となるということは、以前では考えられなかったことであり、風俗画の登場は18世紀の芸術における一つの大きな転換であったといえる。

さて、もっとも大きな問題は文学であり、ハンゲルによる文芸作品の創作が流行するためには19世紀を待たねばならなかったが、18世紀には、既存の漢文学から離れ、より朝鮮人の感情や感覚に密着した「時調」と「歌詞」が数多く作られた。特に、時調は3章6句の約45字からなり、三四調もしくは四四

調を基本とし、ハングルも用いた定型詩として流行した。無論、これらの生産者と享受者は支配階級である両班であったが、徐々に両班よりも下の階級である、下級役人や専門技術者などによって構成されるようになり、19世紀に朝鮮の文明開化の中心的な役割を果たすことになる「中人」階級の人々も楽しむようになってきた。

それでは、日本の場合はどうであろうか。中国の『三才図会』の影響を受けたということもあるが、寺島良安の『和漢三才図会』105巻（1713年）のように自国の事物を網羅的に集め、博物学的に整理しようという動きが現れている。また、18世紀になると、杉田玄白、前野良沢、平賀源内などの蘭学や、賀茂真淵、本居宣長などの国学が整備され、盛んになった。これらは、幕府の官学としての朱子学とは性格を異にし、朝鮮の実学や天主教と合わせて考えるならば、18世紀における新しい思想の動きという点で共通しているといえよう。また、芸術の分野では、日本では大衆的な版画としての浮世絵が誕生し、喜多川歌麿、東洲斎写楽、歌川豊国らの登場によって発展した。文学の方面では川柳や狂歌、あるいは洒落本や黄表紙などが生まれたが、特に黄表紙のように常識を超える複雑で多様な内容を持つ分野が発達した。これらは、知識の整理という意味以外にも、自国に相応しい芸術の発達や文化階層の拡大などという面で朝鮮とも共通点が見られ、他方で都市文化の発展という点では朝鮮とは異なる日本の特徴であるといえよう。18世紀は、従来の文化の中心が関西から関東に移り、主要な都市で発達した文化が互いに影響しあうとともに、身分や分野を超えた、大衆の文化が形成された時期であったといえるだろう。

では中国の状況はというと、『四庫全書』4946巻（1782年完成）が編纂され、膨大な量の書物の網羅的な収集が行われた。また、宋学に対立する実学的な性格、実証的学問としての「實事求是」の考證學が発達し、『紅樓夢』のような一般の生活に密着した小説も出現している。

これらの事象を考えると、18世紀とは、東アジアにおける近世民族主義と同じく、自国の文化についての意識が高揚した時期であったといえよう。これは、芸術の方面でも、文学の分野でも、共通してみられる現象である。ただし、より詳細に検討するなら中国、朝鮮、日本の間には差が存在する。一例として文化の主体、担い手が誰であったか、という点を考えてみよう。朝鮮の場合は、

確かに庶民を題材とする芸術作品や文学作品は現れたものの、その主体が農民までは至らず、芸術や文学を享受したのはもっぱら両班階級が中心であり、より広く考えてみても中人階級までであった。中国も士大夫のような上流階級が中心だとすると、これに対し、日本では武士と町人の二つの階級が各々文化の担い手となっていた。つまり、武士と町人とが、それぞれ文化の担い手として独立した行動をとっていたという点で、同時期の中国や朝鮮とは異なる様相を見せているといえよう。

2.3. 地域圏内の交流と西洋との関わり

さて、文化や経済の交流と西洋との関わりを考えると、朝鮮では、明代には朝天使、すなわち「天の国（明）に送る朝鮮の使節」を派遣していた。これは、清代には燕行使と呼ばれたが、11月頃に冬至使が派遣されたほか、臨時的な使節も派遣されたため、平均して年に2回程度の割合で清に朝貢使節団が送られた。使節団は通常30人から40人程度で、北京に2か月程度滞在するが、この間に使節団一行は清の学者と交流したり、瑠璃廠で書籍を購入したりして帰国した。朝貢貿易の方法は、皇帝に対する献上品とその返礼としての文物の下賜という形であり、清からも勅使を朝鮮に派遣していた。一方、日本へは通信使を派遣した。18世紀に派遣された回数は4回であったが、それらの使節団は人的な交流だけではなく、彼らが持ってきた物による文化刺激という点においても大きな役割を果たしたといえる。

ところで、18世紀末になると西洋の使節が朝鮮半島の付近にも現れる。朝鮮は異国に対する清朝廷のやり方を踏襲するが、国際情勢にさほど関心のない者が朝廷の高官であったため、西洋からの艦船が漂着すると、「野蛮人がやって来た」といった対応をした。一方、日本では漢訳洋書の輸入や、杉田玄白や前野良沢らによって蘭学が発展し、蘭和辞書も編纂されている。また、18世紀後半になると蝦夷地にロシアの船舶が現れ、またイギリス船も来航するなどしたため、幕府は蝦夷地を直轄化しながらも、基本的には鎖国政策を維持しようとした。しかし、アヘン戦争以後には幕府も態度を変えなければならなくなった。

18世紀の清は国内政治は安定していたものの、南方ではキリスト教を禁止

し、北方ではロシアと国境を確定するキャフタ条約を締結し、あるいはポルトガルがマカオの割譲を要求するなど、国際環境の変化に伴って清自身も若干変化を余儀なくされる。すでに、イギリスによる東アジアへの本格的な進出による広東交易が行われてもいた。もちろん、清は清なりに問題を解決しようとするが、却って西洋からの波は強くなる。1793年にはマカートニーがイギリス使節団を率いて北京を訪れて貿易の拡大を要求するなど、18世紀末には西洋との緊張関係という面において、これまでに経験したことの無い事態を迎える19世紀へつながっていくことになる。

3. 壬辰倭乱（文禄の役）と18世紀の朝鮮・日本

3-1. 壬辰倭乱（文禄の役）の文芸化

前近代においても、ヨーロッパの歴史に比べると東アジアの国際関係は比較的に安定した時期が長かったが、白村江の戦い、応永の外寇、壬辰倭乱（文禄・慶長の役）といった、中国、朝鮮、日本の三国が熾烈な戦いを繰り広げることがあった。なかでも壬辰倭乱（文禄の役）は熾烈であったというだけでなく、内外ともに幅広い影響を及ぼした戦いであった。それだけに記録も多く、文学的な作品も多く残されており、また、近代以降、現代に至るまで影響を及ぼしつづけている。特に被害者側であった朝鮮の場合はそのような傾向が強い。17世紀について考えてみると、朝鮮では朝廷が主導して歴史を整理したが、日本では豊臣家から徳川家に政権が移っていたため、国が主導して歴史をまとめるということではできなかった。そのため、日本では、一般の人々はその戦争の全貌について知りたいと思えば、個人的な見聞や日記などを集めてまとめられた文献を読まなければならなかったのである。そのようにしてまとめられた最初の文献が『太閤記』であった。その後、中国で書かれた『両朝平攘録』という文献が日本にもたらされることで中国側の動きが分かり、そのような情報を基礎にして書かれたのが堀杏庵の『朝鮮征伐記』であった。しかし、朝鮮側の動きというものは未だ把握できておらず、中国側の動きについても不明な点が残されたままであった。やがて、朝鮮で刊行された壬辰倭乱（文禄の役）の記録である『懲忿録』が京都で出版されるが、これには貝原益軒が序文を寄せ

ている。その後、日本では文禄・慶長の役について「朝鮮軍記物」と呼ばれる各種の書籍が刊行されるようになるが、それらにより、豊臣秀吉の朝鮮侵略に関する歴史的事実の全貌を客観的に理解できるようになった。すなわち、戦争が起きてから100年が経ち、日本、朝鮮、中国の情報を入手することが可能になったため、総合的、客観的に事態を理解することができたのである。このような朝鮮軍記物の集大成が、1705年に出版された姓貴（生没不詳）という人物による『朝鮮軍記大全』（38巻付録2巻）と馬場信意の『朝鮮太平記』（30巻）である。これらの書籍によって、朝鮮での日本軍の動きや朝鮮、中国の対応といった、文禄・慶長の役の全貌が明らかとなった。これに対し、朝鮮では中国の情報は入手できたものの、戦争相手国の日本側の情報を知ることができなかったことは、注目されてよい。

それでは、その後はどのようになったのであろうか。日本にとって豊臣の朝鮮出兵は歴史上最初の海外征服戦争として、日本が異国で戦争をしたという、当時としては珍しい体験であったため、様々な文芸作品が著された。例えば、1719年に近松門左衛門が書いた『本朝三國志』が上演されている。日本の文学史で『本朝三國志』は「太閤記物」のはじまりとして扱われているように、朝鮮との戦いを描いた最初の劇作品として位置づけられよう。

18世紀後半からは、『天竺徳兵衛聞書往来』や『仮名草紙国性爺実録』など、文禄・慶長の役と関わりの深い作品が集中的に生み出された。これらの劇作品の特徴は、歴史書ではなくあくまで戦いを描いた劇作品なので、事実を描く際にも自国を中心にする傾向が見られる。7年に及ぶ戦争のすべてを描くことはできないため、人形浄瑠璃や歌舞伎では、朝鮮軍記物に登場する人物の中から特徴的な者を選んで主人公とし、そのイメージだけを抽出して物語を構成したのである。また、このイメージは、異国情緒やエキゾチズムとも結び付く。さらには、自国を優越化しようとする意識も随所に表れている。例えば、加藤清正が朝鮮半島で戦った、といった史実を超え、日本と朝鮮の関係を政治的にとらえることで朝鮮に対する日本の優越性を示す形で物語が作られていくのである。

一方、朝鮮では、18世紀においても壬辰倭乱は物語ではなく歴史として記憶されており、時代ごとに説話や伝説にもなり、19世紀になってそれらを網

羅する作品が漢文、漢文ハングル混交文、ハングルによって著される。いわゆる「壬辰録」作品群の成立である。こうした『壬辰録』の異本は現在まで70種類以上が確認されている。

3-2. 朝鮮通信使と書籍交流

ところで、当時朝鮮王朝が日本に通信使を派遣した目的は、日本が朝鮮を再度侵攻する可能性があるかどうかを探ることと、そして朝鮮はあくまでも文化的に日本よりも優位にあるのだから、「文」をもって日本の武士たちを教化する、という点にあった。その意味で、朝鮮通信使は一種の文化使節団であったといえる。日本では別な意味で朝鮮通信使を理解していたが、朝鮮側としては教化を重要な目的の一つとしていたのである。

朝鮮通信使は18世紀に4回日本を訪れるが、毎回、日本の紀行文を著した。その中で、たとえば、1748年の『奉使日本時見聞録』には『和漢三才図会』の名がはじめて記されており、1764年の朝鮮通信使が日本でそれを購入し、朝鮮に持ち帰っている。18世紀には、個人的なレベルで文献などを整備することが流行していたが、その時の参考文献として『和漢三才図会』が利用されたのである。中国の『三才図会』とも関わりがあるが、朝鮮における知識整理の上で『和漢三才図会』が果たした役割は、日本と朝鮮との間の直接的な交流の事例の一つとして理解することができよう。朝鮮の実学者たちは、日本のものであれ中国のものであれ、未知の情報があれば、それを提供する文献を積極的に利用するという、実践的な態度から『和漢三才図会』を利用したのである。あるいは、朝鮮通信使が帰国すると、学者たちは使節団の話聞き、そこで荻生徂徠らの朱子学の解釈などに接することで、その学問的水準の高さに驚いている。これらは、日本の学問や芸術などが朝鮮に与えた影響ともいえよう。

他方、朝鮮通信使が日本に与えた影響については、比較的良好に研究されている。確かに、使節団の中にいた学者や絵師が当時の日本社会に与えた影響というものは小さくなかった。しかし、文化交流は一時的なものではありえないという点からみれば、上記の例のように、日本が朝鮮に与えた影響というものも見逃してはならないと考える。

以上、簡便ながらも朝鮮・日本・中国という東アジア地域を文化的観点から

素描してみたが、そこには「東アジア」という地域の共通点と差異が把捉され、それは政治的側面からの把握とは異なる空間がわれわれの前に開かれるといえよう。

<ABSTRACT>

A Viewpoint Capturing the 18th Century

CHOI Gwan

This paper looks at the 18th century in East Asia for a viewpoint to capture just one century, considering it from aspects of both time and space. Firstly, by comparing the 18th century in the West and in the East, we can say that the West, compared with the East, took a short time to move from early modern to the modern era. In the West, modern civil society and the modern nation state were mostly in place by the end of the 18th century. The West then used its modern nations' wealth and military power to begin its full-scale advance into the East. In comparison to this, the three East Asian countries of China, Korea and Japan were enjoying a period that was relatively more stable culturally as well as politically than had been up to the 17th century, and a period which welcomed the development of domestic ethnic consciousness. Upon this stable base we see a process of consolidation of existing knowledge being carried out in each of China, Korea and Japan, establishing new academia and thought. They also witnessed early modern domestic cultural progress in the arts. This paper furthermore indicates the results of a different type of exchange from the previous era occurring between Korea and Japan.